

「小三通」を体験する

2011.12.05

香港 花木

(1) 概要

国民党と共産党の「国共内戦」は1948年暮れから1949年初までに大方決着が付き、1949年10月には毛沢東が天安門で「中華人民共和国」の建国を宣言、これに対して蒋介石率いる国民党は台湾島に撤退（遷台）した。しかし、国民党率いる中華民国政府は完全に大陸から撤退したわけではなくその後も2つの足場を維持し続けた。すなわち、福建省アモイ市の沖合約2kmに位置する「金門島」と、同じく福建省の省都福州の沖合約10kmに位置する「馬祖島」である。

これら2つの島は、台湾本島からは約150km離れているものの、アメリカの支持を受けた強大な空軍・海軍力により国民党政権はこれを「大陸反攻の足場」として維持し続けてきた。その後、1987年に台湾の戒厳令が解除され、大陸と台湾との関係が改善して交流が拡大する中でも、これら2つの島は引き続き「中華民国福建省」の領土として「大陸の中国共産党政権に対する最前線」であり続けた。



転機がやってきたのは李登輝政権のもとで1990年代前半以降、これら2島の駐留軍の規模が大幅に縮小されたことがきっかけである。駐留軍の縮小による離島経済への打撃を緩和するための離島振興策として、これら2つの島と大陸との「通航」・「通信」・「通商」が2001年から試験措置として実施されることとなった。¹「小三通」の始まりである。

¹ 石原忠宏 「もう一つの兩岸交流「小三通」の回顧と展望」。

2008年からは两岸関係の改善を掲げた馬英九政権の下で「小三通」以外に台湾島から直接の「三通」も認められるようになり、その対象も台湾人・大陸中国人以外に日本人を含む外国人にも開放された。しかし、金門島・馬祖島経由の「小三通」利用者は引き続き増加しているようである。外国人の利用が開放されてから3年目に当たる今年、台湾訪問の往復に小三通を体験してみた。

(2) アモイー金門島ルート

一般に「小三通」と言えばアモイー金門島のルートのことである。アモイ空港からタクシーで約10分と至近の「五通埠頭」からは日中ほぼ1時間毎に金門島行きの船が出ており、一日平均の利用者は約2千人に上っている。船は約30分で2km沖合の金門島に到着し、そこから接続バス又はタクシーで金門空港を経由して国内線で台北松山空港をはじめとする台湾各地に多数の飛行機便が飛んでいる。飛行機便の数の豊富さ、松山空港発着という利便性及び直行国際線より大幅に安い国内線料金がこのルートが旅行者に選ばれる大きな要因となっているのだ。



← アモイ高崎空港に近い五通埠頭。胡錦濤総書記の標語入り看板が出迎えてくれる。



←フェリーは200人乗り。料金160元。

<金門島>

金門島はかつて鄭成功が拠点にしたこともある軍事上の要衝であるが、それだけでなく海をまたにかけて活躍する華人商人の拠点でもあった。金門島には当時の豪商が建てた私設学校が残されているほか、東南アジア一帯に展開した華人間で送金機能を担った当時の銀行の様子も紹介されている。



←往時の豊かさがしのばれる街並み。

1949年10月、新中国成立直後の毛沢東率いる中国共産党は大陸内各地に点在する国民党の「残党」を掃討する作戦を開始した。当時国民党が有していた最大の拠点は福建省の商業都市アモイだったが、国共内戦の大勢は決着済みで連戦連敗の国民党の士気は振るわなかったという。

こうした中、太平洋戦争の終戦時駐蒙古日本軍司令官であった根本博中将は、在蒙日本人の円滑な帰国に配慮してくれた蒋介石への個人的な恩義を理由に国民党軍顧問としてアモイ防衛作戦に参加、人口の多いアモイを放棄して金門島に立てこもり、ここを拠点に中国共産党軍を討つ戦術を提案し、上陸した約1万人の人民解放軍をほぼ殲滅した（古寧頭の戦い）。しかし、実はその時殲滅された解放軍兵士の多くは、それまでの国共内戦で捕虜とされた旧国民党軍将兵だったという。²

² 門田隆将 「この命、義に捧ぐ ~台湾を救った陸軍中将根本博の奇跡~」。

朝鮮戦争の後、人民解放軍は再度海岸沿いの国民党拠点の掃討に乗り出し、1955年には浙江省大陳島を奪取（これにより「中華民国浙江省」はなくなった。）、1958年には再度金門島に大規模な砲撃を加え多数の死傷者を出した。これに対して国民党政府はアメリカの支援を得て反撃を行い、更にアメリカ軍が戦術核の使用も真剣に検討するに至って中国は一方的に休戦を表明したものの、大陸から金門島への砲撃は1979年の米中国交回復まで続いたという。金門島内にはこうした緊張の歴史を伝える多数の塹壕・構築物があるほか、大陸から撃ち込まれた砲弾を鋳つぶして作る「金門包丁」が特産となっている。



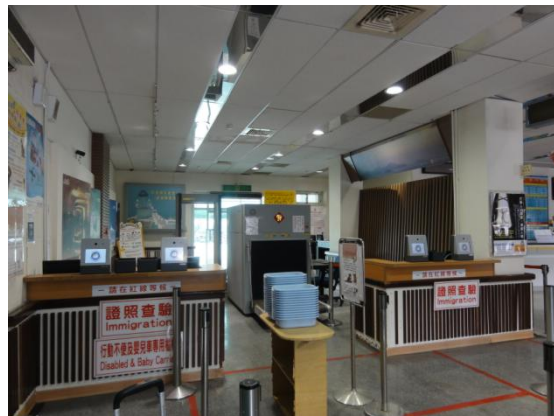
↑ 島内に張り巡らされた地下壕（左）。金門包丁の製造販売店（右）。



↑ 金門島の海岸から遠く望むアモイの街並み。高層ビルが林立している。

(3) もう一つの小三通（福州－馬祖ルート）

小三通にはアモイ－金門島ルート以外にもう 1 つ、福州－馬祖ルートも存在する。しかしこちらは福州側の馬尾埠頭の立地場所が悪く空港までの乗り継ぎが極めて不便であることや、海上航行距離が長く 1 時間半を要すること、馬祖がより沖合に位置することによる風の強さで航空便の運航が不安定なこと等もあってあまり使われていないようだ。実際、馬祖－福州のフェリーは小型バス程度の大きさで、1 日の運航便数もわずか 1 往復に過ぎない。



↑ 「馬祖－福州小三通」便（左）。出国施設も金門島とは異なり小ぢんまりとしている。

馬祖島は金門よりはるかに軍人が目につく。もちろん軍事施設が多いのだが、軍事上の理由というより単純に金門島のような産業がないため、離島振興策として多数の軍人を駐屯させているように思われた。実際、コンビニ、飲食店、クリーニング店、旅館で見かけるのは軍人ばかりであり、その消費が島の経済を支えているのだ。



↑ この島では消費を支えるのは専ら若い軍人である。（セブンイレブン馬祖店ほか）

馬祖は絶海の孤島で島のどこへ行っても風が強い。家並みも強風に耐えられるよう石造りのものが多く、その光景は「台湾のギリシャ」と呼ぶ人もいるようだ。



↑ 独特の街並みを持つ馬祖の集落。「台湾のギリシャ」との声も。

(4) 最後に

台湾では目下、来年1月14日に実施される総統選挙に注目が集まっている。選挙の争点は国内問題が主なようだが、大陸との「兩岸関係」を今後いかに発展させていくかは国民党・民進党の大陸政策が大きく異なるだけに大いに注目される点である。馬英九率いる国民党は「92年コンセンサス」に基づく「一つの中国」を標榜するのに対し、蔡英文率いる民進党はかつて共産党と中国政権を争った意味での「中華民国」は既に存在しておらず、台湾人による新しい国が生まれているといういわゆる「一辺一国」論を基調としているからである。実際、最近の世論調査を見ても、台湾人の80%以上が「台湾は中国とは違う独自の国だ」と考えているとされ、「台湾人」としてのアイデンティティが浸透しているようだ。

しかし、金門島・馬祖島は歴史的にも文化的にも「台湾」よりはるかに「大陸」に近い地域である。島民にも台湾人としての意識はほとんどないだろう。また、仮に台湾が「一つの中国」を否定して中台関係が緊張した際には、かつてと異なり強化された海軍力を持つに至った中華人民共和国側は台湾海峡に対してこれまでとは比較にならないほど強い影響力を及ぼすことも可能となっている。

台湾と中国との関係が今後どう進展するかはわからないが、その進展によっては、歴史

に翻弄されてきたこの 2 島に再度歴史の光が当たることもあるかもしれないと漠然ながら感じざるを得なかった。



↑ 馬祖島から大陸の空をにらむ対空砲火施設。(既に使われていないもの。)

(以上)

Disclaimer: 本資料中の数字は注意してチェックしていますが正確さを保証するものではありません。

文章中意見にかかる部分は個人的見解でありいかなる組織の意見でもありません。